

第三部 事例紹介

【パネリスト】

あんしんケアセンター千城台

訪問看護ステーションかがやき

ユニバーサル就労支援ネットワークちば

千葉市在宅医療・介護連携支援センター

ケース概要

氏名：ジョン・スミス氏 (John・Smith) (仮名)

年齢：70歳

世帯：独居・生活保護 集合住宅に居住

家族：日本人の妻・連れ子がいたが別居 交流無し

生活歴・特徴

→長く日本に住んでいるが、母国語以外の言語が不自由

→介護保険は未申請 (DASC-21 28/84) (長谷川式 21/33)

→身体機能は自立

→喘息 (通院状況不明)

支援開始までの経緯

3か月ほど前に、妻がカードの使い込みで負債を作り家出し独居となる。

生活が困窮したため生活保護を申請し受給開始するが、日常生活全般を家出した妻に任せていたため、金銭管理が困難となり、自治会長や知人が保護費の受取りや銀行の引き出し等を支援していた。

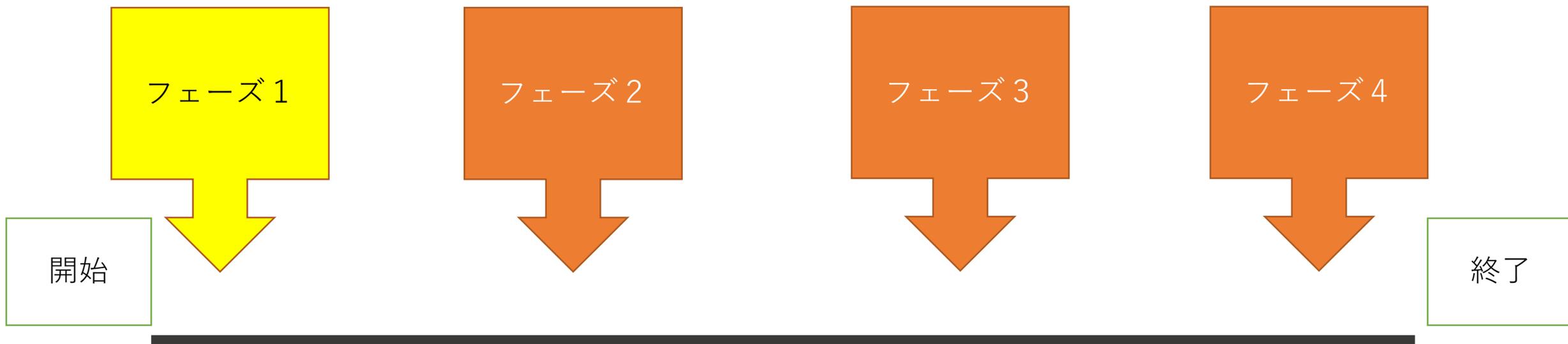
しかし、自治会長や知人に対し被害妄想的と思われる発言や「お金、お金」と近隣住民宅のドアを叩き騒ぐことが増え、支援の困難さを自治会長が住宅の管理人に連絡し、あんしんケアセンターに相談があった。

母国語以外の言語が不自由で、行政（生活保護担当）は翻訳機（タブレット）を使用し対応しているが、円滑なコミュニケーションは困難な状況である。

言動が認知症によるものなのか、精神的な不安感の有無かといった点や、本人が生活上の困っているところなど、言葉の壁がありアセスメントが進まない。

本人の状況や周辺の情報から推量するにも、家族も不在で情報が少ないため、あんしんケアセンターから、若葉区の認知症初期集中支援チームに相談し対応を協議し、地域ケア会議を実施した。

経過



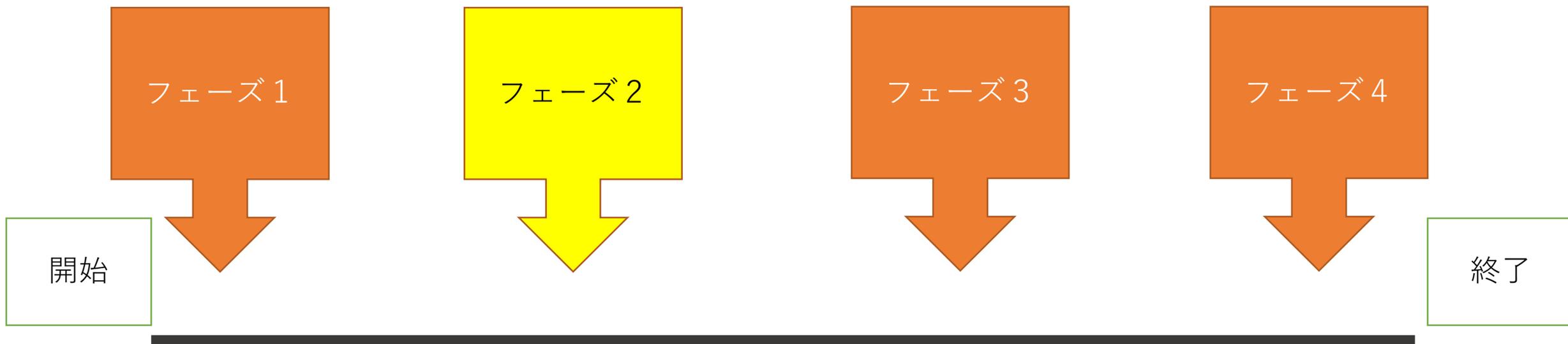
フェーズ1 言葉が通じない

- 先ずは本人宅に訪問することにした、あんしんケアセンターと訪問看護ステーション、行政も同行し、改めて本人の状況の確認を行うこととした。
- しかし、言葉が通じないので、あんしんケアセンターが近隣の高齢者施設に従事する、本人と同郷の外国人スタッフに通訳を依頼した。

【ポイント】

施設職員に頼んだ理由

経過



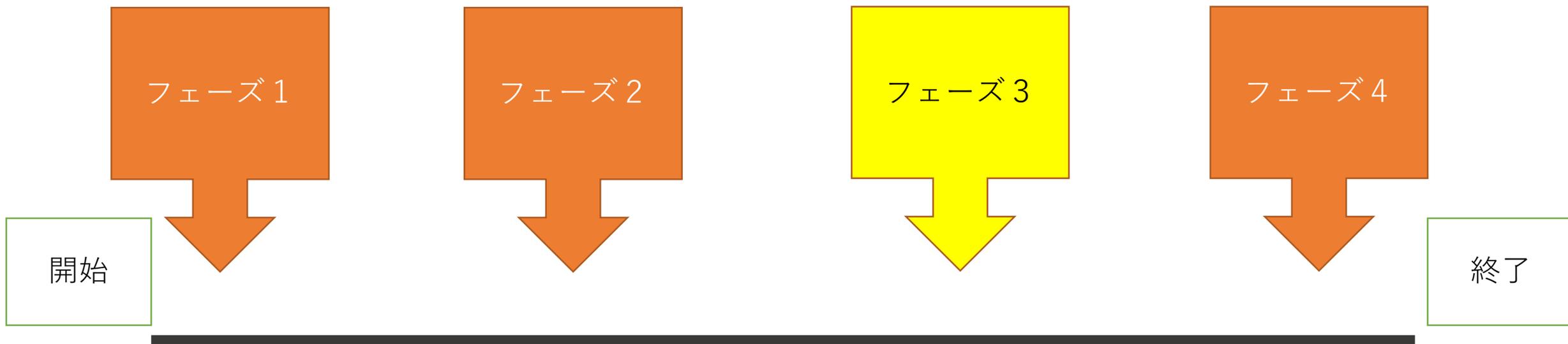
フェーズ2 情報が得られた

- 認知症検査、健康状態の確認を実施
- 母国に前妻と子がいる、パスポートの期限が切れていることが判明
- 母国へ帰りたい、でもお金ないし、帰っても生活が心配・・・と本音が漏れる

【ポイント】

本人の意向の聞き取りで注意したこと
今後の支援体制における役割分担

経過



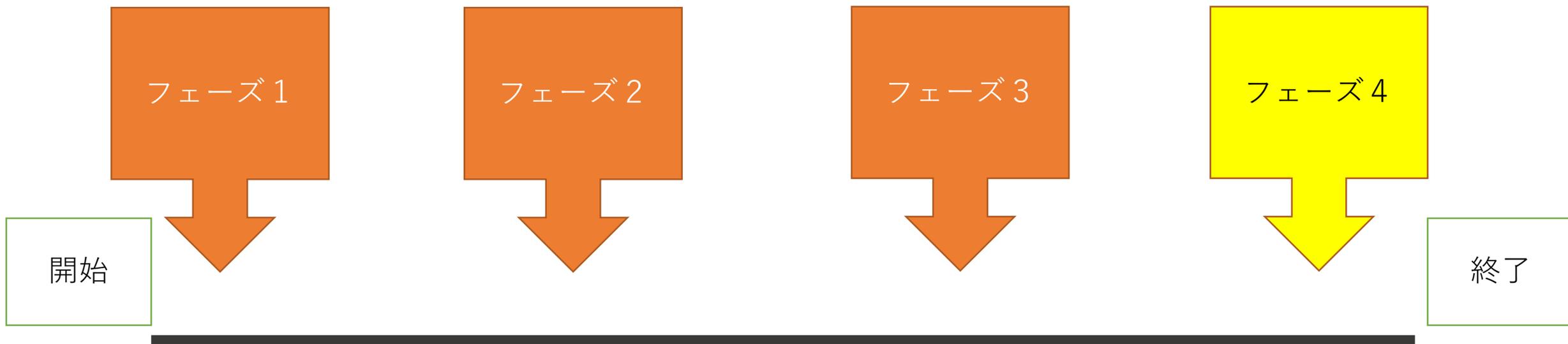
フェーズ3 帰国できるかもしれない

- あんしんケアセンターに寄せられた情報
 - 家出した妻から帰国に協力すると申し出たこと（行政）
 - 金銭の出納状況（自治会）
 - 体調管理の状況（医師・訪看）

【ポイント】

情報のハブになる機関の存在

経過



フェーズ4 終了

- 帰国

→妻が現地まで付き添い、前妻に引き継ぐこととなる。

【その後の振り返り】

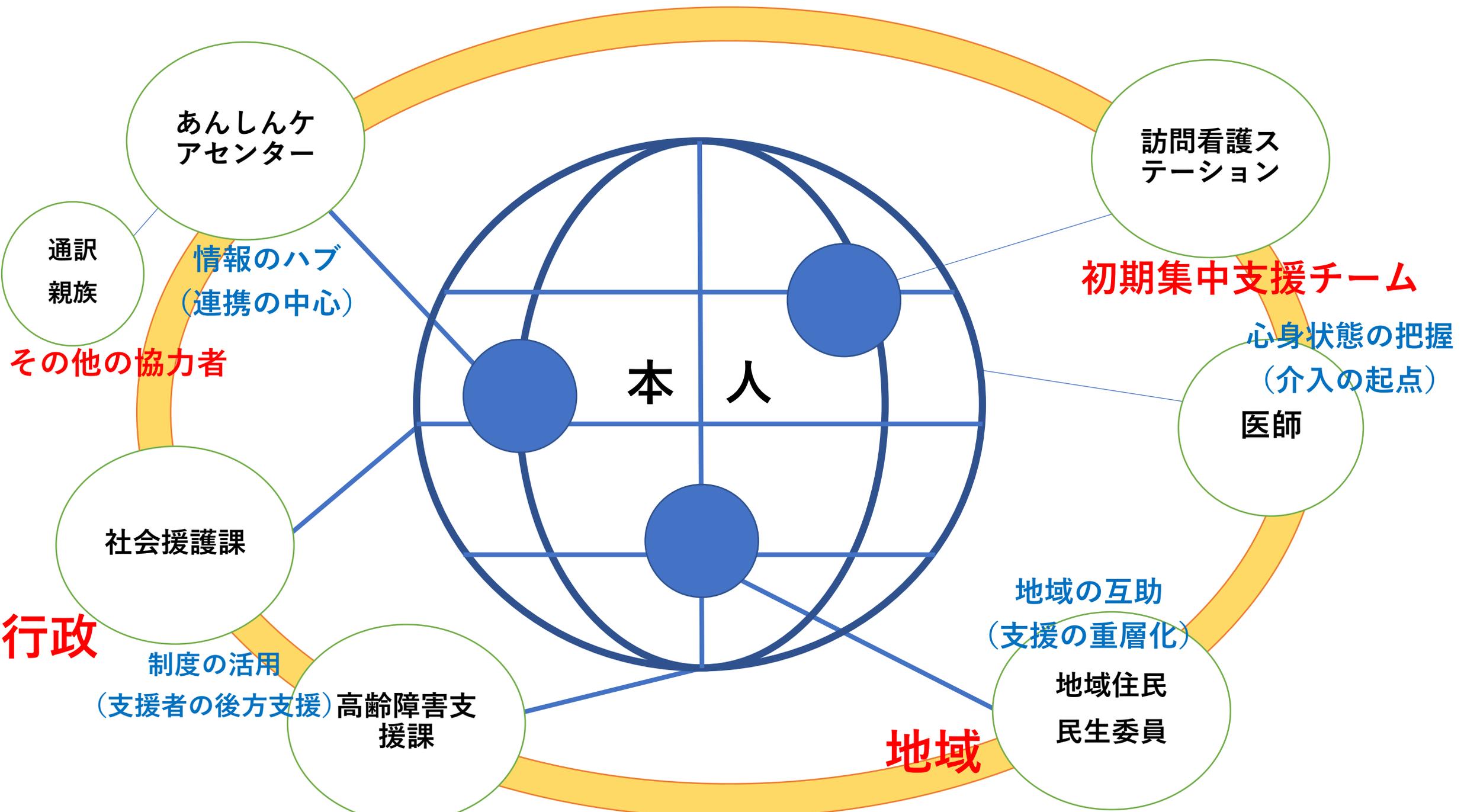
- ・言葉の壁の問題をどうクリアするか
- ・今回は帰国できたが、お金や親族の問題、日本に留まりたいという意向があったとき、どのように支援を行えるか

まとめ

- 多様な課題に対する支援は、支援の体制構築が必要

(今回の事例)





あんしんケ
アセンター

通訳
親族

情報のハブ
(連携の中心)

その他の協力者

社会援護課

行政

制度の活用
(支援者の後方支援)

高齡障害支
援課

訪問看護ス
テーション

初期集中支援チーム

心身状態の把握
(介入の起点)

医師

地域の互助
(支援の重層化)

地域住民
民生委員

地域